

季刊

弥生の出雲王に出会える



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOI NOMORI MUSEUM



マスコットキャラクター
よすみちゃん

第7号

(2012年10月)

【年末年始の休館期間】
12月29日(土)～1月3日(木)

★インフォメーション

●ミニ企画展

10月27日(土)～1月14日(月)

「出雲を掘る 第3話

うつわを焼く ―竈窯と登窯―

【観覧無料】

市内の発掘調査などで見つかった、「やきもの」を焼いた窯と、そこから出土したやきもの片・窯道具・窯壁片などを発掘時の写真とともに紹介します。

【平安時代】須恵器を焼く

出雲地方最大の竈窯群

……木舟窯跡群(小境町)

【江戸時代】磁器を焼く

県内最初に磁器を焼いた登窯

……雲州久邑長沢焼窯(多伎町)

【現代】西谷の土で陶器を焼く

市内に現存する最古級の登窯

……萬祥山窯(大津町)

市内の現役の登窯

……出西窯(斐川町)

(原 俊二)

●ギャラリー展示

10月17日(水)～1月14日(月)

「発掘された戦国の山城

―出雲にも多くの城が!―

【観覧無料】

戦国時代(約500年前)を中心に、出雲市に相当する地域でも数多くの山城が築られました。その数は、現在確認されるもので140ヶ所に及びます。

出雲の戦国時代は、応仁の乱の影響を受けた東軍方(細川方)と西軍方(山名方)に分かれた戦いから始まります。守護代尼子氏と地域領主の塩冶氏・三沢氏らとの緊張関係、そして、大内氏・毛利氏との対立など、さまざまな場面で山城が築られました。

山城は、いくつもの平坦地(郭)や防御のための施設からなる大規模なものから、小さな郭だけで一時的な陣地とした小規模なものまで、その性格は多様です。

発掘調査によって、山城の構成が明らかになるとともに、出土品から山城を築いた人々の文化の一端を知ることができます。

(高橋 周)

●速報展示

10月31日(水)～12月28日(金)

「聖谷奥一遺跡 写真パネル展」

【観覧無料】

聖谷奥一遺跡は、出雲市多伎町奥田儀にある「国史跡聖谷たたら跡」のさらに300m奥に存在します。昨年度、島根県の林道宮本聖谷線工事に伴って、文化財課が3月から7月にかけて発掘調査を実施しました。

その結果、聖谷川沿いの狭い谷あいの平坦面に、近世の炭窯跡が2ヶ所見つかりました。当時田儀櫻井家がたたら製鉄を盛んに行っていた時期であり、燃料である木炭の生産を考える上で、貴重な発見となりました。この調査成果を写真パネルで紹介しますので、ぜひご覧ください。

(景山真二)



遺跡全景(北から)

★特集 研究ノート⑦

「出雲を掘る 第三話
うつわを焼く」

「甕窯と登窯」より

日々の生活で使ううつわを作るためには、粘土つくり・成形・乾燥・焼成など、さまざまな工程を経なければなりません。そのなかで最後の難関が、穴窯や登窯を使った焼く工程です。

窯は、数日間、薪を焚き続けて1000度以上の高温になります。この工程での炎の管理が、うつわの出来不出来を分けることとなります。成功すれば製品として出荷され、人の手に渡っていきます。失敗すれば捨てられ、人の目にも留まりません。

ところで、何百年も人知れず眠っていた窯が発掘調査で見つかり、脚光を浴びることがあります。その一例が、市内小境町の木舟遺跡です。ここには、平安時代（1200年前）の須恵器を焼いた窯跡がありました。

同時代の出雲地方の窯跡の調査例と比べると、見つかった窯跡の数が8つと多いうえに、須恵器

の失敗品もおびただしい数でした。窯跡から見つかる資料は、その当時、どのようにして須恵器を焼いていたか。どのような形のうつわを焼いていたか。製品はどこに運ばれて使われたか。など、その時代を知るための格好の資料となります。

今回、ゆがんだり、くつついたりした須恵器・窯道具・窯壁などの出土品の他に、発掘時の写真などをを用いて解説します。

さらに、市内多伎町にある江戸時代（180年前）の磁器を焼いた久村長沢焼の窯跡出土資料とともに、当博物館が建つ大津町西谷の土を使う現代の窯元も紹介します。

（原 俊二）



木舟4号窯の内部。須恵器を焼くために並べた状態のまま見つかった。

★発掘調査の現場から④

「上塩冶横穴墓群」

（出雲市上塩冶町）

古墳時代後期の出雲では、横穴墓という墓制がはやります。横穴墓とは、丘陵の斜面に穴を掘り、人間を埋葬した施設のことです。数基から数十基、多いところは数百基で構成されます。

上塩冶横穴墓群は、出雲工業高校裏山から塩冶神社の南方にある谷にかけての丘陵に位置する県内最大級の横穴墓群で、これまでに38支群180穴以上が知られています。その数はさらに増える可能性があります。昭和30年以降、数度にわたり発掘調査が行われました。なかには、6世紀末と考えられる横穴墓もありますが、7世紀前半以降の横穴墓が大部分を占めていることがわかっています。

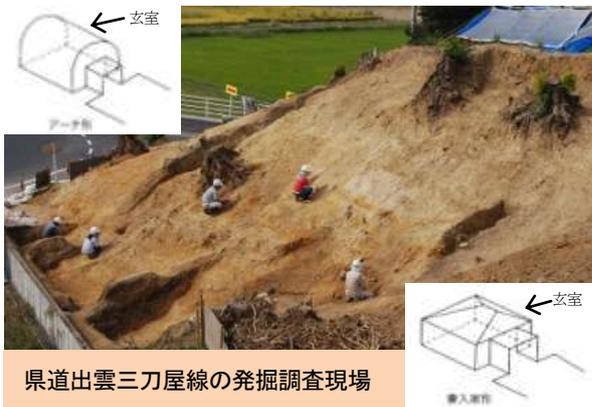
上塩冶横穴墓群を玄室の天井形式、平面プランからみると、古いグループは天井がアーチ形、平面が縦長長方形をもちますが、その他は天井が妻入家形、平面が正方形のもの（下図参照）がほとんどと考えられます。谷の入り口付近

から谷奥に向かって横穴墓が造られたものと推定されています。

発掘調査によって、家形石棺や石床のほか、金銅装大刀、金環、金糸など優れたものも発見されています。

文化財課では現在、県道出雲三刀屋線の道路改良工事に伴ってこの遺跡の発掘調査を行っています。この調査によって横穴墓の規模や構造などがわかり、塩冶地域の歴史が少しでも解明されることを期待しています。

（宍道年弘）



県道出雲三刀屋線の発掘調査現場

★指定文化財紹介⑤

「蓮台寺の寄進状」一通
「諏訪神社の棟札」四点

(出雲市斐川町)

中世の有力領主のひとり米原氏は、尼子十旗の六番目に位置付けられた武將で、高瀬城(斐川町)を本城としていました。

米原氏の全盛は、平内左衛門綱ひろ(へいないひょうえつなひろ)と平内兵衛綱寛の親子の時(十六世紀半ば)で、高瀬城周辺に多くの祈願所や品々を残しています。今回は、米原氏に関わる古文書二件をご紹介します。

「蓮台寺の寄進状」は、南明山蓮台寺(三絡)に土地を寄進したことを示す米原綱寛直筆の文書です。蓮台寺は、永祿年間(一五五八〜一五六九)に祈願所となり、綱寛から田畑(約二反五畝)・米十俵相当の寄進を受け、今後、田畑の維持管理をすることが記されています。



寄進状

「諏訪神社の棟札」は、米原氏が諏訪神社(学頭)の上棟に際し、四回にわたって関わったことを示す史料です。



右から一号〜四号棟札

もともと古い一号棟札は一部が欠損していますが、薄い文字を赤外線撮影により判読すると、最初は天文年間(一五三二〜一五五五)で、米原綱寛が関わっていたことがわかりました。その後、綱寛の子の綱寛も三回にわたって上棟を執り行っています。『雲陽誌』(二七一七)出雲郡学頭項に書かれた「諏訪大明神 建御名方命なり、中略・古老伝に云高瀬の城主米原氏の建立なり」は、この史実と符合します。

このように、高瀬城の周辺は、米原氏が寄進、勧請した寺社が多く残された、米原氏ゆかりの地であったことがわかります。

(六道年弘)

★文化財課のおしごと紹介②

「金属器の保存処理」

「文化財の保護」、これは文化財課の核となる理念です。保護とは、文化財を後世に遺し、活用することです。今回はその中の金属器(主に鉄製品)の保存処理について紹介します。

鉄は、弥生時代から利器として我々の生活に最も密着し使われてきた金属です。発掘現場から出土すると「鉄製品が出た」と喜びが込み上げてきます。それと同時に、これを後世に遺していく適切な作業が必要になります。なぜなら、鉄はサビで腐食し、形もわからないうちにバラバラになるからです。



樹脂含浸装置

含浸作業には気圧を減らすことができてきる特別な装置を使います。

鉄が腐食する要因の一つに塩分があります。この塩分を除去することで腐食の進行をある程度止めることができます。そこで、①乾燥、②脱塩、③含浸の工程で作業を進めます。

まず、①乾燥させて泥やサビを取ります。そして、アルカリ水溶液に鉄製品を浸して、②脱塩を行います。その後、③強化とサビを防ぐためにアクリル系接着剤を鉄製品に染み込ませます。これを樹脂含浸といいますが、最後に、細かく割れた鉄製品を接着剤で接合します。破片がないところには、パテを入れて着色し、形を整えます。

出雲市内で出土した鉄製品は、このように保存処理が進められています。

(坂本豊治)



樹脂含浸が終わった後、展示ができるように壊れた破片を接合します。

★講座のご案内

▼館長講座(全3回)

「発見と感動の考古学シリーズ」

12月8日(土)

①「荒神谷遺跡」の巻

12月22日(土)

②「加茂岩倉遺跡」の巻

1月12日(土)

③「西谷墳墓群」の巻

右の講座はいずれも

【講師】渡邊貞幸(当館館長)

●時間 14時～16時

●受講料 3000円

●定員 80名

▼ギャラリー―展関連講演会

1月14日(月・祝)

「出雲の山城(仮)」

【講師】山根正明氏

(松江市史料編纂室専門官)

●時間 14時～16時

●受講料 無料

●定員 80名

(受講は事前にお申し込みください。)

★イベントのご案内

▼2012古代出雲歴史探訪

ミステリーウォーク

11月18日(日) ※雨天決行

大社地域で開催(出雲大社周辺)

①文化財コース【約7.7km】

●集合 旧大社駅

●受付 9時～10時

●参加料 500円

(高校生以下100円)

●申込 出雲弥生の森博物館

●締切 11月8日(木)

※お申し込みは当館まで。

②縁結びコース【約5km】

※お申し込みは出雲商工会へ。

(Tel 53・2558)

▼出雲市無形文化財発表会

兼「出雲の國伝統芸能交流大会」

12月2日(日) 10時～16時

(大社文化プレイスうらら館)

無形民俗文化財に指定されて

いる神楽など、市内外から8団体が

伝統芸能を上演します。

●入場料 当日500円

前売400円

(中学生以下無料)

※当館で前売券購入できます。

★館長コラム③



小学生でも知っている(縄文時代↓弥生時代↓古墳時代)という時代区分は、考古学の大先輩たちの努力によって、昭和の初めごろにはほぼ出来上がっていました。しかし、それは敗戦まで、学校で教えられることはありませんでした。歴史の授業では、古事記に書いてある神話を「史実」として教えることになっていったからです。

このような教育の反省の上に、戦後の歴史教育は出発しました。戦争中に^{ひっそく}逼塞させられていた考古学が、ようやく表舞台に躍り出たのです。考古学にこんな受難の時代があったことを、ご存じでしたか？

記紀や風土記に載っている神話は、飛鳥・奈良時代における伝承を筆録して編集したものです。その時代の人々の思いや世界観、政治情勢を色濃く反映する古代史の重要資料ですが、言うまでもなく、それに先立つ時期の歴史的事実を語るものではありません。一方、考古学は発掘によって動

かぬ証拠を提示する実証的な歴史学です。考古学が明らかにする歴史は、多くの場合、想定を超えた意外性に満ちており、これがこの学問の大きな魅力です。夏に開催した特別展「よみがえるな！」で伝えたかったのも、まさにそうした歴史の真実でした。

出雲の古代史は、考古学によってこそ豊かに描き出すことができます——これが私の持論です。出雲は考古学の研究が最も進んでいる地域の一つですし、考古学資料の宝庫なのですから。

(渡邊貞幸)

※各種講座・イベントは、当館へ電話またはFAXでお申込みください。

(発行) 出雲弥生の森博物館 2012年10月
 〒693-0011 鳥根県出雲市大津町 2760
 (TEL) 0853-25-1841 (FAX) 0853-21-6617
 (e-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp
 http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

●入館料/無料(特別展等観覧料を除く)
 ●開館時間/9:00~17:00(入館16:30まで)
 ●休館日/火曜日(祝日の場合翌日)・年末年始